

30代教師の転

起
んでも
きる!

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める!



「先生の授業はハズレ」と評価され 思考力と得点力が結びつく授業を模索

鹿児島県立鹿屋高校

立神倫史先生

37歳

私が乗り越えてきたもの

進学校で打ち砕かれた自信

歴史の謎に真正面からぶつかる魅力を伝え、その答えを自分で見つける力を育てたい。そんな気持ちを抱いて教師になりました。初任校は生徒の進路が多様に分かれていたこともあり、博物館から借りた土器を教室に持ち込んで観察させるなど、とにかく日本史に興味を向けようと努めました。中には、「先生のおかげで日本史が好きになった」と言う生徒もあり、指導には自信を持っていました。

しかし、次に赴任した鹿屋高校では、限られた時数での受験指導が求められ、私の授業スタイルは通用しませ

でした。生徒の興味・関心を引くことが中心の授業では、教科書の進行は遅れるばかり。そのため、模試などの平均点が低迷し、赴任後2年間で、生徒や保護者の間に、「立神先生の授業はハズレだ」という評判が広まりました。

マンガに負けた私の授業

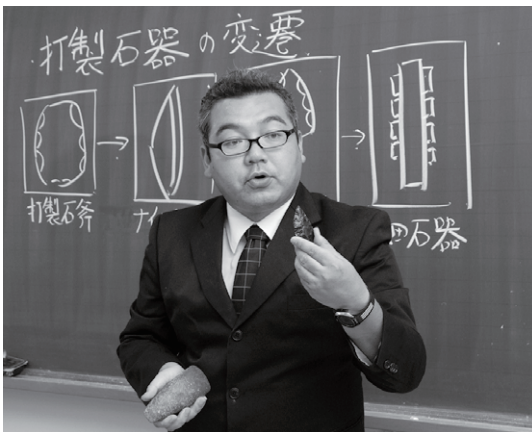
当時、日本史が苦手な学習意欲も上がらない理系の生徒がいました。私は授業中の声掛けなどで意欲を高めようとしたものの、手応えは感じられず、3年の秋頃にはすっかり諦めていました。ところが、その生徒はセンター試

験でそこそこの点数を取ったのです。数学の教師に勧められて読んだ歴史マンガが役立ったということでした。

私は、自身の指導力のなさと、教師として生徒の学力伸長を諦めたことへの恥ずかしさを痛感しました。「全員が入試で確実に得点できる授業をしよう」。そう決意し、過去の模試やセンター試験を分析して出題傾向を把握し、暗記やスキルを重視した授業に切り替えました。その結果、確かに平均点は上がったのです。「自分のやりた

い授業ではない」というジレンマはあったものの、ある種の達成感は抱いていました。

生徒の力を伸ばすことを諦めてしまった自分



たてがみ・みちふみ ◎教職歴12年。同校に赴任して5年目。担当教科は日本史。2学年担任。鹿児島県立鹿屋高校 ◎全日制／普通科／共学。10年度入試では、国公立大は、鹿児島大、熊本大、宮崎大、九州大、大阪大などに合格し、医学部医学科や歯学部にも合格。私立大は、早稲田大、法政大、明治大、立命館大などに合格。

そして、これからも挑み続ける目標

いかに問題文を読み込ませるか

平均点の低下に目を疑った私は、センター試験を受けた全生徒の問題用紙を集め、思考過程を生徒のメモから分析しました。見えてきたのは、2013年度全面実施の新課程に合わせて思考力や分析力を要する問題が増え、多くの生徒がそれに対応できていない状況です。文章を読んで正誤を判定する問題や、前後の時代との関連を問う問題を間違える生徒が目立ちました。

原因は明らかでした。私が「必ず得点力が付く」と豪語して行っていたのは、出題頻度の高い箇所を暗記するよう指導する授業だったからです。暗記

思考力を育む授業をしたい

自分の指導を根底から改める必要を感じた私は、まず、教科書を熟読することで、歴史事項をストーリーの中で位置付けさせようと考えました。

教科書はあらかじめ家庭で読んでもらうよう指示し、授業では重要な段落だけを選び、キーワードにアンダーラインを引かせながら、声に出して読ませます。空いた時間は、人物同士の関係や事件・出来事の相互の影響を理解できるように、教科書に載っていない背景知識の解説に充てています。毎回授業の冒頭で、私がその日の内容に関連する寸劇を演じるなど、ストーリーの印象を強める工夫もしています。家庭学習でも、やみくもに用語を覚えるのではなく、常にストーリーを意識して教科書を読み返すよう指導しています。

更に、弱点を自覚させるため、模試や定期テストの後、間違えた問題を自分なりにまとめて提出させる指導も始

教師人生を通して挑む指導テーマとの出会い

めました。最初は私がポイントを整理したプリントを参考にしていました。が、赴任5年目の2010年度は、自主的に教科書などを調べてまとめる生徒が増えており、考える習慣が定着してきていると感じます。

教師が歴史の謎を問い掛け、生徒自身が考えるところという私の理想の授業は、思考力を育む工夫の中で、少しずつですが、実現しつつあります。「もともと歴史を勉強したい」と、考古学専攻に進学した生徒が現れたことも、自分の指導を後押ししてくれました。

考えることの大切さを伝えながら、それを生徒の進路実現に結び付けていく指導の確立に、今後の教師人生を通して挑み続けたいと思います。

立神先生 の 授業実践



Q&A

Q 思考力を付けるために、模試や定期テストの結果をどのように活用していますか？

A 振り返りノートを用意させて、問題用紙から間違った設問や解説を切り取って貼らせます。その際に十分なスペースを確保しておき、そこに正解と共に、関連する内容を生徒たちなりにまとめさせます。例えば、正解が「白鳳文化」という問題に対し、「飛鳥文化」と誤答した場合は、二つの文化の特徴をまとめて比較します。知識の補強だけでなく、「自分は何が分かっていないのか」を自覚し、自分自身で弱点を理解して学習に向かっていく姿勢の育成を期待できます。

Q 歴史をストーリーとして捉えさせるために、授業でどのような工夫をしていますか？

A 「本能寺の変で討たれる6時間前の信長」「大坂夏の陣で真田幸村に本陣を急襲された時の家康」など、生徒が興味を持ちそうなテーマを選び、寸劇を行っています。気を付けているのは、単に面白おかしく創作するのではなく、「この文献に基づいて再現している」など、明確な根拠を示すこと。これにより、寸劇の内容と学習内容がつながり、歴史がストーリーとして認識されます。教科書に沿った授業はどうしても淡々と進行しますが、寸劇を始めてから授業にメリハリが出て、生徒の集中力が高まっているように感じます。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す立神倫史先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、立神先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp